

# ああ、相談業務

～ 春奈さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

12

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

発達相談室に移動してから数年後には、市役所を退職し、臨床心理士としてスクールカウンセラーをはじめ、更に私設相談室の開設をして、フリーで動くことが多くなった。私設相談室は、当市に筆者のところしかないため、ありとあらゆる相談が紹介されてくるようになった。これからはそんなあちこちでの相談業務の話も含めて事例を加工しながら伝えていきたいと思う。

子どもたちが携帯電話を持ち始めてから、様々なトラブルが増えたのは周知の事実であるが、中でも、大きな問題となったのは、簡単に知らない人と繋がり、その結果実際に会って、性的関係を持ち、妊娠してしまうケースである。以前にも似たような話を書いたが、また違った視点も含め春奈さんの話を紹介しようと思う。

## 家族

春奈さん（以下本児）は17歳、高校2年生で

ある。父親40歳公務員、母親38歳パート、弟15歳、中学校3年生。家はまだ築数年の一軒家。春奈さんの高校は、公立高校で、レベルで言えば中の上くらいのところ。コンビニでアルバイトもしている。弟は、上位の公立高校を目指している。母親は勉強にうるさく、過干渉なところがある。父親も厳しいところがあるが、母親ほどではない。

## 相談の始まり

保健師さんから、高校生の女の子が妊娠して困っているので相談に乗ってほしいとの電話が入ったのは9月末のこと。産婦人科を受診、妊娠が確定、予定日は、翌年の4月初旬という状態で、母子手帳をもらうようにと言われて保健センターに来所した。母親がついては来たが、車で待っているとのことで、窓口には顔を出さず、本児のみだった。

母子手帳発行時に、書類に記入したりアンケートに答える作業がある。種類には、相手の名前や

連絡先、自宅の連絡先などを記入するし、アンケートには、自分が今回の妊娠をどのように受け止めたか、自分自身が愛されて育ったか、精神既往はないか、持病はないか、喫煙や飲酒はないか、相談相手は誰かなどなど、本人の愛着や、母性、或いは経済状況、支援者等を把握するための質問が連なる。その結果を見て、妊婦の状態を把握し、どの程度の支援が必要かを検討する材料にするのだ。本児の場合は、未成年なのに母親が付き添わなかったこと、即ち母親との関係が悪いだろうという仮定の下、本児の支援が必要と保健師が判断し、カウンセリングに紹介されたのである。

## 相談経過

北海道の夏休みは短く、8月半ばには学校が始まる。学校は二期制のところが多いので、10月初めには秋休みがある。そのちょうど秋休みの時に、事務所の方に来てもらって話を聴くことにした。

本児は一人で来所された。細身で、しっかりした感じの、女の子である。まずは申込書に記入をしてもらうのだが、字は、小さめでまるっこい、かわいらしい字を書いていた。

一通り、家族の話を聴くのが私のパターンなので、父親のこと、母親のこと、弟のこと、更には父母の両親のことなど聴かせてもらった。父母の両親も健在で、父方は道外、母方は近くの市に住んでいるという。母方の実家には度々遊びに行くが父方は遠いので、年に1回行くかどうかだとのこと。父母の関係性は特に悪くはない様子。弟とは、余り口をきくこともないが、特に仲が悪いわけでもない。母親とは少しぎくしゃくしている感じが聞き取れ、父親の方がまだがやはり距離を取ろうとしていることが分かった。弟は本児より成績が良く、父母の期待を一身に受けているという。本児が高校受験の時は、母親に勉強のことで言われることが多く、塾に行かされたりしたが、結局、そんなに成績は上がらず、行けるところで

考えて受験し、現在通っている高校に合格したそう。

学校内での成績は中くらいか少し下という。勉強はあまり好きではないが、高校を卒業したら、専門学校に行って、ブライダル・プランナーか美容師になりたいと話してくれた。

今回の妊娠については、妊娠検査薬で確認し、その後産婦人科受診をするにあたり、仕方なく母親に話したそう。その時の母親の反応は、半狂乱で、怒鳴り散らされ、「弟が大事な時に何をしてくれたんだ！」「そんなふしだらな子に育てた覚えはない！」とか「近所に知られたら母さん生きていけない！」とか「高校も辞めて、出ていけ」とまで言われたそう。とはいえ、20歳までは未成年の時代である。出ていくところもない。母親が落ち着くのを待つしかなかったそう。

母親が少し落ち着いてから、病院を受診し、妊娠が確定した。

相手は携帯のサイトで知り合った男性で、本州から夏休みに遊びに来た折に出会い、性的関係を持ってしまった。相手に妊娠したことを告げたとたん、連絡を絶たれたという。まあ、無責任な男の典型みたいな、所謂チャラ男であった。こういう話は、よくある。そもそも携帯のサイトで知り合っているのに、相手の名前が本名かどうかもわからない。連絡先は変えられてしまったらもう連絡を取ることもできない。住んでいる住所もでたらめなケースも多い。認知などももちろんしてもらえないだろう。

若年の妊娠の場合多くが墮胎できない時期まで妊娠の発覚が遅れ、生まざるを得ないということになる。その場合、父母は動揺し、子をなじることもあるが、最終的には腹を決めて、生むことを受け入れる。そして、生むまでは母親も協力してくれる。ただし、生むまでに、生まれたら里子に出すか、自分たちで育てるかの選択はされていることが多い。これも、生まれた子を見ていて里子に出す予定を変更して、自分たちで見ると言い出すことも間々ある。

本児の場合、今の時点であれば、まだ墮胎が可

能である。墮胎すれば、学校にも知られずに卒業までいて、専門学校にも予定通り進める。しかし、このまま妊娠を継続すると高校も辞めねばならなくなるし、本児が望んでいる専門学校への道も遠のく。もし墮胎するというなら、保健師を通じて病院を紹介することになるし、それには保護者の同意も必要となる。墮胎の危険性についても説明をする。将来子どもが欲しいと思ったときに妊娠しにくくなる可能性や、最悪子どもが出来なくなる可能性さえある。その説明を受けた上でまずは、本児が生むつもりかどうかを考えてもらわねばならない。

本児はここに来るまでにも保健師から同様の話を聴いていたそうで、よくよく考えたが「生みたい」と筆者の目をまっすぐ見てはっきりと言った。そこに本児の意志をしっかりと感じた。

生むと決まれば、今後どのようにしていくかの話になる。

今、母親はどのように言っているか？父親はどうかと聞いていく。母親は生むことに反対していて、「生む」と言ってからは口もきいてくれないという。父親は最初こそそうらたえて、相手の男を見つけて責任を取らせるなどと言っていたが、見つけることが難しいとわかると、本人が生むというならそれでよいのではと言っていて、そのことで父母の喧嘩が繰り返されているようだ。弟は我関せずの状態。「私のせいだ家族が壊れそう」と本児も涙を浮かべて話していた。

一般的には、父親の方が拒否的で中々認めてくれないが、母親の方は折れて、結局娘の妊娠を支え、出産後も手伝ってくれることが多い。生まれてきた子に罪はない。赤ちゃんは誰からも愛されるようにかわいらしく生まれてくることもあって、母親はおばあちゃんとしてというより先輩ママとして、率先して赤ちゃんの面倒を見てくれる。そして父親もいつの間にか赤ちゃんをかわいがり、おじいちゃんになっていたりする。こうなれば理想的である。しかしこのケースでは反対であった。

本児が生むつもりであれば、妊娠中から出産に

至るまで、どうしても誰かの支援が必要である。法的には結婚できる年齢ではあるがまだ精神的には幼い。しかもシングルである。母親として胎児を守り、子を産むには親や周りの支援が必要である。したがってどの程度の支援をもらえるかの把握は重要である。

そしてもう一つの決断は、生んだ後のこと。自分で育てるか、施設や里親に預けるかである。

これについても本児は自分で育てると言い切った。高校は諦めて退学し、この子を育てたいと。母親としての自分を夢見ている雰囲気を感じられ、ちょっと不安になったので、子育ては大変であることも話してみた。それでも本児は自分で育てたいということで、それではということで、本児の父母との面談を提案してみた。

父母に理解してもらい、協力してもらうためには、父母と話していく必要がある。本児もそれを望んでいると言ってくれたので、本児の了解のもと母親に電話をすることにした。そして、学校をどうするかについて話をうつつした。学校に妊娠がわかれば即退学のところも多い。今すぐ退学するつもりかあるいは通信に転学するつもりか？今でないとしたらいつ退学あるいは転学するか等検討していく。高校の修学旅行は2年生の10月～12月に行くことが多い。本児は修学旅行に行ってから退学したいという。本児の学校では秋休み後まもなく修学旅行に行くそうで、それまで学校には隠しておきたいというのである。今まであまり学校を休んではいけないので、つわりがひどければ休むことも可能だという。

しかし、体育の授業はどうか？妊娠が安定してからであれば旅行も可能であるが、まだ3か月に入ったばかりで安定期ではないので、修学旅行は諦めたほうが良いのではと伝えてみた。万が一、途中で流産になったりしたら、病院にも行かなければならないし、学校にもばれてしまうと。

あれこれ言ってみても、本児の気持ちは決まっていて、つわりはあまり酷くないし、体育は理由をつけて休めばよいし、修学旅行はどうしても行きたいと主張し、譲らない。頑固な子である。

何とか説得して、体調によっては行かない選択をすることを約束してもらって一回目の面談が終了となった。

数日後に父母に来てもらって話を聞いた。勿論今回のことは、父母にとってショックであったことは想像に難くない。その気持ちを受け止めつつ、今後についての話をする。

本児の意志が固く、生むつもりであり、また育てるつもりでもあることを本児の了解のもと伝えた。それに対し、父母も、本児は一度決めたことは通す子だと表現し、その気持ちは理解してくれた。自分たちの育て方が悪かったのだろうかなどに話が移ったりもしたが、過去を反省することよりもこれからのことを考えようと伝え、父母の覚悟のほどを確認した。父親は「もう仕方がないから生ませてやろう」と言い、母親は「百歩譲って生ませて育てられっこない、育てるのは結局自分だからそれは嫌だ」と主張。生ませるなら母方祖父母宅に預けて、そっちの病院で生ませるなどと言い出した。母方祖父母もまだ60代後半で元気なこともあるのだろうし、世間体を考えていることも分かった。また、学校については、父母としては高校を卒業してほしいので、通信への転学を望んでいるとのこと。修学旅行への参加については「すきにすればいい」と投げやりだった。

そこで、父母に介入し、今は、結構こういうケースがあること、シングルで子どもを育てている若年の母親もそれなりにいること、そういう母親との横のつながりも造っていけたらよいと思うこと、子どもを育てられるかどうかは、やらせてみなければわからないこと、先輩ママとして教えてあげてほしいこと等を伝えつつ、今この場で、もう一度喧嘩ではなく、冷静に、よく話し合っしてほしいと伝えて、傍観していた。

最初こそ、母親は中々父親と意見を一致させようとせず、「男親なんてどうせ何もしないから」と反発したり、「負担は全部私に来る」と言ったり、「弟にも良い影響は与えない」などと母親が言えば、父親が「俺もできることはやるから」とか「弟の方は高校に行ってから出産になるじゃな

いか」などと言い、二人の話し合いは紆余曲折しつつも、

もともと仲の悪い夫婦ではなかったことが幸いして、最終的には本児の出産は認め、母方祖父母宅の方に病院を決めてそちらで生むこと、しばらくは祖父母宅で育てること、「もしあの子が子育てを放棄するようなことがあったら里子に出す」ということで決着がついた。修学旅行については、今までも全くつわりらしいものもなく、体育も普通にやって来たことから、行かせてみるという結論になった。つまり本児の思いが通ったのである。心配ではあったが、これが家族の決断であるならそれを支持するしかない。ただ、母親には、母親だからこそわかる妊婦のしんどさや異常もあると思うので、その時は修学旅行に行かせないでほしいとお願いした。こうすることで、母親としての支配的な部分を少しだけ残しておきたかった。もともと厳しい母親であるので、すべてのことが母親の意にそぐわない形になれば、母親と本児の関係性も悪くなるだろうと思ったからである。

数日後にもう一度本児の面談を設定し、来てもらった。本児はにこにこ表情も良く、明日から修学旅行に行くと話してくれた。父母が受け入れてくれたことをとても喜んでいて、体調もよさそうだが、くれぐれも体調管理を怠らないように伝え、調子が悪かったら活動も休むようにと伝えた。また、修学旅行が終わったら、すぐに学校に今の状況を伝えて転学の手続きを進めることを提案。父母にもこれは伝えてあるので、一緒に動くことを勧めた。

一か月ほどたって、本児から連絡が来て、無事修学旅行を終え、転学の手続きも終わったこと、通信制の高校に転学することで、普通に3年で卒業できることなどの報告を受けた。

翌年4月に、母親から電話があり、本児が無事女の子を出産したこと、学校の方は通信なので何とかなっていること、祖父母宅から赤ちゃんを連れて戻ってきていること、弟の方は無事レベルの高い進学校に入学し、姪の誕生を彼なりに喜んでいただとの話も聴かれた。母親も本児がきっ

と寂しかったのかなという反省の中で、本児を認め、先輩ママとして本児を応援してくれていることなど話してくれた。めでたしめでたしだった。

## まとめ

本ケースのように子どもが生まれてから、祖母の態度がコロッと変わって、可愛がるようになることは多い。生まれるまでは里子に出すと言っていた母親や祖母も、生まれてみたら可愛くて自分たちで育てると言い出すこともある。また、娘の子を母親が自分の子として養子縁組して育てるケースもある。いずれにしろ、生まれた子が産んだ母親やその家族の中で育てられることが一番である。

本ケースは大分前のことであるが、最近はこちらのケースが増えている。10代の妊娠と言っても、高校生ならともかく、中学生の妊娠が問題となってきている。そうした若年の妊娠は、SNSで知り合っただけというのがほとんどである。

本ケースのようにめでたい形で終わることもあるが、妊婦が家出をして、所在不明になったり、父母に受け入れてもらえないことで、自殺してしまったり、一人でトイレやどこかで生んで、殺してしまったりと、悲しい結果になる事もある。捨て子も相変わらず時折見られる。

諸外国では婚外子の割合は50%ほどの国もある。日本は2%程度しかない（注1）。この違いが、こうした悲劇の遠因にもなっている。世間体やらなにやらで、我が子の妊娠を喜ばない事情は分からないでもないが、出来てしまったのであれば、その子を受け入れ、育てていく社会にしていく必要があるだろう。

緊急避妊薬についても、婚外子を認めていく方向になれば、レイプ等の犯罪被害や若年の妊娠等でもない限り必要なくなる。少子化が問題となっている今、子どもを増やそうというのなら、この問題の早期の解決が望まれる。本ケースを書きながら改めてこんなことを考えた。

## 注1

国名	(2020年)	
	婚外子率	合計特殊出生率
日本	2.4	1.33
韓国	2.5	0.84
トルコ	2.8	1.76
イスラエル	8.1	2.90
ギリシャ	13.8	1.28
ポーランド	26.4	1.38
スイス	27.7	1.46
カナダ	32.7	1.50
ドイツ	33.1	1.53
イタリア	33.8	1.24
オーストラリア	36.5	1.58
アメリカ	40.5	1.64
オーストリア	41.2	1.44
イギリス	44.0	1.56
ニュージーランド	48.3	1.61
ベルギー	52.4	1.72
オランダ	53.5	1.55
デンマーク	54.2	1.67
スウェーデン	55.2	1.66
ノルウェー	58.5	1.48
フランス	62.2	1.79
アイスランド	69.4	1.72
メキシコ	70.4	2.08
コスタリカ	72.5	1.72
チリ	75.1	1.61
相関係数	r = 0.180113	

出典) OECD Family Databases (2020)